

お俊（其噂桜色時）

へ雨の降る夜はシナ ひとしお床し 冴えては月になお床しへお俊は一人湯帰りに 浴衣をちよつと抱え帯 紅葉袋に映ろいて しがらみならぬ横櫛に ついたぼ上げの平元結 顔にかかれば仇名草 夜は嵐の花川戸 馴れにしくぐり押し開けて 内に入るさえ物案じ

へ昨日伝兵衛さんの言わしやんした関破りというはこの俊がためには大事のお主様 どこにどうしておいでなさる事ぢややら その御難儀を我が身に代え お救い申したいばっかりに

あの伝兵衛さんに モ心に思わぬ愛想づかし 嘸さぞ腹が立ったでござんしょう 堪忍して下さいませ いや／＼このような事言うて ひよっと人に聞こえては一大事どりや身じまいしてしまおうか

へ昨日より今日は思い十寸鏡の 曇るとならば花の空 上野の鐘か浅草か 無常を告ぐる風の綾へ浮き名が中に伝兵衛は お俊が心を疑いて 忍ぶ姿の頬かむり 佇む軒は目覚えの 確かにここぞと 門の戸を 叩くうちにも心急ぎ

へここ開けてもらいましょう ここ開けてもらおうぞ

へそういう声は

へオ、伝兵衛じゃ

へ伝兵衛さん お前まあ何しにござんしたエ

へ何しに来た、これお俊 この伝兵衛はお主が心を聞きに来たのじゃ 昨日秋葉であのような愛想づかし どうも合点がゆかぬ どういう訳じや サそれが聞きたい

へ私が心聞きたくば お前の心から先へ言うたがよいわいな

へそりや何を

へ伝兵衛さん お前はほんにアノ菌生の前とやらを尋ね出だし 首討たしやんす心でござんすかエ

へオ、そりや知れた事 あの駿州清見が関を越えたる菌生の前は 関破りの科人 今宵中に尋ね出だし 首討って出さねば この伝兵衛が身の上の願いがかねわぬ じやによって 草を分けても詮議するのじや

へそれさえ聞けば 何も聞く事はござんせぬ さあ／＼早う帰って下さんせ エエ戻って下さんせ

へコレお俊今思い出したように帰れ 戻れ ア、聞こえた 昨日秋葉の素振りといい わりやコ心変わり だな

へアイシ知れた事いなア

へチエエおのれはな おのれはなア

へ変わる心に伝兵衛は 急き立つ胸を押し静め 思い直してもたれ寄り へ女子心は疑いの 深い 仲にもなお深い 二人が仲に水差して へたとえ退かしてあるとても 言い交わしたを反古にて そなたは添わぬ心かと 無理に引き寄せ裏問えば

へ伝兵衛さん切れて下さんせ

へ何だどうした

へサアいつまで言うていおうより お前に愛想がつきた という証拠は お前の紋の付いた私が小袖 今見る前で モ寸々に引き裂いてしまう程に 心の残らぬよう それから見えていやしやんせ

へ押入の戸を引き開くれば へ以前忍びし菌生の前（へ顔見合せてびっくりし）

へヤッあなたは ホ、ホ、ホ、ほんに私とした事が 未練らしゅう小袖を引き裂こうの何のと言う事も ないかいな 伝兵衛さん たった今 切れ文書いてもらいましょう

へ何だどうした

へサア今の戸棚の小袖の代わりに 私を斬 サア私へ切れ文書いて下さんせ

へハテ心ありげな言葉の端々 今のは確かにソ

へエ、

へんめ模様 小袖代わりの切れ文を

へ早う書いて下さんせ

へそんなら切れ文今書くぞよ

(へあの仰山な顔わいなア)

へ世の中を何に例えん飛鳥川 昨日の淵は今日の瀬と 変わり易さよ人心 硯引き寄せ伝兵衛は
墨さえ薄き縁ぞと 思い諦め書く文の まいらせ候も後や先 へ傍にお俊は見ぬ振りも 風につれ
なき露の蝶 今はこの身に愛想もこそも 月夜の空や鳥鐘を へ恨みし事もあだ枕

へそれ望みの切れ文書いたぞ受け取れ

へこれで心がさっぱりとしたわいな

へお俊もうこの世では

へエエ

へ逢わぬぞよ

へ更けて砧の音さえゆかし へお俊はあとを見送り

へ伝兵衛さん

へ変わる心のつれなさを さぞや恨みて腑甲斐ない 女子心と思わんしよが 言うに言われぬ身
の願い へ愛想づかしのあるじょうも 胸に涙を押し入れの 傍へそろ立ち寄って

へお前様の御行方を 方々とお尋ね申しましたに ようこそお出で下されました 蘭生の前様

へ人丸

へア、モシお声が高い 壁に耳

へ人や聞くととも白藤が 暖簾の内より

へお俊坊

へエ、私やモウびっくりしたわいなア

へハテきつい肝のつぶしようのう イヤ肝がつぶれるといやあ ヤ見れば見る程美しい この愛嬌でアノ

伝兵衛どんと色事だもの ヤ有り難てえわい

へ白藤さんやっぱりお前は邪慳かえ

へなにさ たとえ邪慳でなければとて 誰も構い手はねえのさ

へそのように言わしやんすな 構い手があるまいものでもござんせぬぞえ 白藤さん 昨日秋葉で一寸言

うたことありやお前 どうして下さんすエ

へこれさそんな事言うて 俺を困らせる事あねえわな こなあんは 伝兵衛どんとは二世までも という仲

じゃござんせぬかえ

へサその伝兵衛さんとは 切れてしもうたわいな

へなに切れてしもうた

へという証拠は サこれ見て下さんせ

へヤ成程こりゃア切れ文 そんならほんまに切れたのかエ

へどうしてまあ嘘に切れ文が 取られるものでござんすぞいな

へうむや読めた こなあんはアノ伝兵衛どんと縁を切っても アノ押し入れの内の命が助けてえっ との

ことか

へサそれは

へハアテヤ変わった色事でござんすのう 伝兵衛どんになり代わり どれ戸棚の内を

へアアこれ待たしやんせ

へなぜ止める

へオオ憎く

へそりや誰が

へ白藤さんが

へヤ憎いとは

へ私やお前に

へ何がエエどうしたい

へ待っていたわいな

へ松になりたや有馬の松に 寝てみて訳も白藤に 這いまつわるる嬉しさは 菜種の花も山吹も
言わぬ色なる仕なしぶり へそれと人目に閑取はお俊を突き退け立ち上がり 行かんとするを
へ引き据えて 見て見ぬ振りのせなと背男の髪をかんざして かき撫でながら声曇り そりや素
気無いぞえ白藤さん源太さん いかに関取さんじゃてて 力ばかりか心まで 其の様に強い者か
いな ほんに相撲の噂にも 手取り手取りと聞き慣れて 思い染めたる其の日より 氣にくせ付け
て忘れられず 心の丈をうちあけて いうて島田の縫れ髪 取り上げられぬ仇惚れに 女子の道が立
つものか へ深き思いは小野川に 濡れて恋増す風情なり

へヤそれ程までにこの白を藤 思うてくれる志忝ない そなたの願い叶えてやろう

へエッそんなら

へイ、ヤ伝兵衛どんの切れ文 サそなたを斬り文叶えてやろう

へエーエ嬉しゅうござんす

へ目と目のうちに心解け 義理と忠義の裏表 思いは二つ二筋の 帯こそ恋の命ぞと 言ううち粹
な風吹いて

へ女に稀な忠義者

へ消ゆる灯火暗きより 心の闇の屏風山 内に思いやこもるらん 内に思いぞこもるらん。